



profile  
しかけ絵本技師・切り絵作家

## 平塚 啓

瀬戸市職員。1級建築士。2009年「100SHEEP」が紙わざ大賞19優秀賞受賞、2013年「ひとりぼっちのむこうがわ」がおおしま国際手づくり絵本コンクール入賞、2014年「はなふるめぐる」が同コンクール優秀賞・井口文秀賞、2017年「けいとだまさんきょうだい」が同コンクール銅賞。高校生、中学生、5歳児の父でもある。



WEB SITE

個展 「平塚啓 個展 PaperArt かぜをさる」

日時 2021年11月24日(水)~30日(火)、10~21時(最終日は17時)

場所 丸善名古屋本店 6階ギャラリー(名古屋市中区栄3-8-14)

## 自分らしさをプラスした新たな表現を試みたい



上)人が亡くなり骨になるまでを描くことで、この世の無常を示すとされる仏教絵画「九相図(くそうず)」から発想を得て制作した「樺九相図」

下)糖をモチーフにした作品を多数制作する高北さんの影響を受け、立体の切り絵で糖の花を制作。糖は瀬戸市の花でもあります



下)しかけ絵本「はなふるめぐる」。平塚さんの作品には「命はめぐり、つながっていく」というテーマが根底にあります

に付き添ったとき、父親と過ごした子ども時代を思い出しました。建築の道へ進んだのも、技術屋だった父の影響です。孫である3人の息子たちにも、きつと父の遺伝子が受け継がれていると思います。

昼間は職員としての仕事があるため、制作は夜に限られます。グラフィックデザイナーとして活躍する高北幸矢現名古屋造形大学名誉教授兼清須市はるひ美術館館長からアドバイスを受け、滑らかな動きで美しく花が開くように、しかけを何度も修正しました。1カ月に2ページのペースで作りを続け、ようやく納得がいく一冊を完成させました。

作品は富山県の射水市大島絵本館が主催する「おおしま国際手づくり絵本コンクール」で優秀賞・井口文秀賞を受賞。「思い入れのある一冊が大きな賞をいただいたことで自信が付き、自分の作品と呼べるようになりました」。

これまで制作活動を続けながら、ワークショップの講師を務めたり、個展を開催してきました。そんななか、岐阜県で開催されたイベントでプロの切り絵作家と出会ったことがきっかけとなり、切り絵の制作を始めました。

切り絵の制作は、下絵を描いてパソコンに取り込むところからスタート。次に、下絵を切り絵用のデザインにするためグラフィックソフトのイラストレーターで修正を加えます。修正作業は切り絵の仕上がりを大きく左右するため、紙を細かく切る作業よりも、神経を使います。仕上がったデザインを五感紙に印刷し、カッターで切っていきます。「一般的には下絵と黒い紙を二枚重ねにして切っていくのですが、私は五感紙に直接印刷して切っています。道具も



動画で絵本を見てみよう!  
※音量にご注意下さい



上)共働きの妻と育児を分担。5歳の三男を寝かしつけた後、21時頃から制作の時間。「切る作業は集中できる無の時間です」  
下)ポップアップの「薔薇」の花びらの一部。数枚を組み合わせて、立体的な花に仕立てます。10cm程度の切り絵は、およそ5、6時間で完成します

## 新たなテーマに挑み 自分だけの表現を追求

平塚さんは名古屋生まれ。尾張旭市に移り、瀬戸市へは市役所入庁を機に引越しました。「生まれ育った土地ではないのに、瀬戸にはふるさとを感じます。都会過ぎず、自然豊かなところがいいですね。モノづく

「今後は、子育てや子どもをテーマにした作品に取り組みたいですね。子育てのシーンをそのままにするのではなく、自分らしさをプラスした新たな表現を試みたい」。理想は誰も作ったことがない、誰にも真似できない作品。「私の作品を見て、何かを感じてもらえたらうれしい。そして、切り絵の面白さや魅力が伝わればいいなと思います」。

専門的なアートナイフより、カッターナイフを使うことが多いですね。何点か制作するうちに、「切り絵は、しかけ絵本に比べると制約が少なく、より幅広い表現ができる」と感じるようになりました。

当初は、紙の色を生かした切り絵を制作していましたが、「落ち葉の切り絵では、紙の色を脱色した後、さらに色を重ね、より本物に近い色を追求しました。今後は、色を使ったシリーズを展開していきたい」と意欲を見せます。

「制作へのインスピレーションを与えてくれます。制作に行く詰まったときは東谷山や海上の森に出かけます。一人の時間がまとまって取れたら、半日ほどゆっくりと山歩きを楽しみます」。植物や動物のモチーフが平塚さんの作品の特徴。落ち葉を持ち帰り、切り絵の見本にすることもあります。

## 巻頭特集 しかけ絵本技師・切り絵作家 平塚 啓

### 自分だけの表現を求めて

# Paper Artの世界

瀬戸市在住の平塚啓さんは、市の職員として働きながら1級建築士の技術を生かし、しかけ絵本技師・切り絵作家の肩書をもちます。イラストが動き立体的に飛び出す、しかけ絵本、動物や植物などをモチーフにした美しく精緻な切り絵。1枚の紙から生み出される、さまざまな表現や世界観が見る人を魅了しています。



## 趣味で始めた制作活動 賞を獲るまでの実力に

平塚啓さんが制作活動を始めたのは2005年。愛・地球博の開催に合わせてオープンした瀬戸蔵で、市の職員として1年半ほど施設管理を担当したのがきっかけでした。「さまざまなイベントを開催するなかで、子ども向けに『飛び出す招き猫』のポップアップカードをつくるワークショップを企画しました」。その際、しかけ絵本を何冊か購入し、制作方法を研究。「おもしろくて、自分でも作ってみたいくなりました」と振り返ります。趣味として始めたものが次

第にのめり込み、各地のコンクールに応募するようになりました。

2014年制作のしかけ絵本「はなふるめぐる」は、バラやヒマワリなど季節の花のポップアップが飛び出します。ストーリーは、花になった天国のおばあちゃんとの会話を軸に展開。この絵本には、亡くなった父親への思いが込められています。「健康自慢の父親でしたが、60歳のとき難病になり、あつという間に亡くなってしまいました」。大きなショックを受け、命の無常を感じたといいます。しかし、自身に子どもが生まれ、親子の何気ない関わりのなかで気づきがありました。「息子の自転車の練習